

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

ムッシュュー・サバラ

江口 法子



「マダム、これおいしいよ」、ダアスの石畳の清閑な小路で声をかけられたのが、そもそもムッシュューとの馴初め。

「へエー、〇〇行ってきたの、そして

ら、あの有名な〇〇見て来たか？」

「さあ——」

私の旅は大抵こんな具合である。名所旧蹟なんて半分も知らない。勿論、訪ねるつもりで足もそつちを向くのだが、何故



ムッシュュー・サバラ

か途中で寄り道。なんでもない小路、なんでもない人々、味、匂い、雑踏、そんなものが言い知れぬ魅力で迫ってくるのやからしょうがない。

砂漠の真中のダマスカスに着いて、キヨロくウロく。まずは市中探検を。チャイハナ（茶店）には暇そうなおっさん達がズラリ。首都だけに外資系のオフィスが目につく。立派な建物。チャドルを被った婦人。ぼつちやりした色目美人、ハツとするようなりりしい男性も目につく。タクシーはピカピカのベンツが多い。果物屋、パン屋、街中は相当な混雑ぶりだが、全然せわしくない。そんなこんな

を見回しながら、ふと、住宅街に続く石畳の小路に踏み入ってみた。両側の落着いた構えの家々が、風通しのいい、快い日陰を作り、カナートで運ばれる冷たい水を求めてそこで一服する人々がいる。

その傍に、大だらに果物を並べて売っているおじさんが一人。映画でよく見る手投弾みたいな大きさ、形のもので熟して黄色くなつたのを氷の塊りの上で冷やしている。近所の子どもたちが、小銭を握りしめて走ってくる。よくよく品選りして、コレツと指さす。おじさんはホイツと包丁で突き刺し、クルツと皮をむいて渡す。それをすぐさま、パクツと口へ。よし、私も試してみよう。よく熟んだ大きいのを指さした。ホイツ、クルツ、パクツ。ウーン、ま、あけびのような味、舌触り。小さい種があるのまで似ている。種は飲み込むのだが、私はあかんわ。こんなところで盲腸にはかかりたくない。「おじさん、これ何ちゅうもんや?」「マダム、これはサ・バ・ラいうもんや」一個三〇円くらい。ムツシュー、嬉しかったの

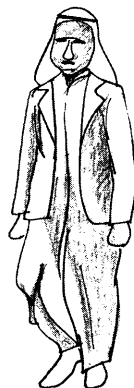
か見知らぬマダムに椅子（携帯用）の埃を払って勧めてくれた。「マダム、シャイ（茶）を飲むか?」灯油バーナにやかんをかけて、沸騰したところへ紅茶をパツ。次に砂糖をサツ。ハイ出来上り。ガラスの小さなコップの一杯の熱々のシャイ。灼熱の国の風通しのよい日陰の小路で思いもかけぬティータイム。真青な空、ニコ／＼笑っているおじさん。おじさんはアラビア語、私は京都弁。お互い通じる言葉?は英語とアラビア語の一から十の数字だけ。

瞑想の音楽

最近、メタムジークとか、ミニマル・ミュージックとか呼ばれる新しい傾向の音楽が台頭しはじめた。

ベルリンで開かれたメタムジーク・フェスティバルがその発端のようで、この

× × ×
こんな出会いが忘れられなくて又々、トランク片手に飛び出して行く。それではムツシュー・サバラ、アツサラーム。



街中をゆく背広の紳士

（えぐち のりこ 心理クリニック・センター）

稲垣 静一



程来日したフェスティバルの企画者ワルター・パツハウア氏の話によると、これまでのヨーロッパ中心主義的な音楽という概念を超えた音楽、あるいは超えるという認識の上に立脚しているようだ。会